

選句「いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛しあうならば、神がわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内に全うされているのです。」(12節)

①、ごめんなさい。ちょっと難しい表現になってしまうのですが、この箇所をまとめさせていただきます。この箇所は4章1節-6節との対比で読む必要があります。

「イエス・キリストが肉体をとって来られたということを公に言い表す霊は、すべて神から出ています。・・・イエスのことを公に言い表わさない霊は神から出ていません。」(4:2,3)。ここには、キリスト(メシヤ・救い主)理解の違いが示されています。歴史のイエスの生涯と業に神の啓示を見ようとしなくて、グノーシス(特別な宗教的認識)にキリストを見ようとする「偽預言者」(4:1)への反駁が文脈にあります。

「グノーシス」者の救済観は特別な「知」に収斂されて、人間や歴史や倫理と、関係なしで「宗教的救い」が認識されるというのです。ひらたく言えば、兄弟も、隣人も、「敵」さえもどうでもよいのです。それに対してイエスに神を見る見方は「愛」が必要なのです。これが4:7-12です。「愛することのない者は、神をしりません」(8)の如く、交わりに身を置くことなくしては救いの体得、会得、習得はないのです。

② この箇所には大事な二点があります。①「愛は神から」(7)。愛の根拠は神にあって、人間の内からは出てこないということです。このことを徹底し、筋を通すために、「独り子の派遣」(9)「罪を償ういけにえ」(10)の思想を挿入付加したのは後代の教会だといわれています。「神から」の「から」は起源と本質を特徴づけています。「啓示宗教」の根幹、聖書の信仰の基本です。その「神から」を「イエス」に集中するのがヨハネです。②「愛しあうならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり」(12)。神は徹底して、人間の外なるものであるにも拘らず、「内にとどまる」という逆説が語られます。ここでは、ヨハネが主張する、神関係(信仰)と人間関係(倫理・愛)は切り離せないという大きな構造があります。「ヨハネの手紙」を学ぶ大事な点です(たとえ、ヨハネの愛は、イエスの愛敵と違って「壁の中の愛」だという批判があったとしても)。

③、さて、次に、人間つまり我々の次元の問題です。ヨハネは「愛しあうべき」(11)だとも「愛し合うならば」(12)ともいっています。「べき」は、努力目標です。「ならば」は、可能性を秘めた促しです。いずれふせよ、我々が、愛の主体になりうるということが肯定されています。ここは大事なところですが、愛は「独り子の派遣」という神の痛みの出来事ですが、それに与かることが、認められているのです。他者を生かす小さな愛(関わり、痛み、労苦)でも、それは「神がわたしたちの内にとどまってくださり」(12)る徴である事を、私は「救い」として喜びといたします。

「神は愛なり」(定義ではなく、働きの意味)(8)「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛した」(10)など、名句の多いこの箇所を身につけたいと存じます。「神の痛みに与かる」具体例のお話は皆様がお聞かせください。